

街の復元

佐藤和宏 + 筒井哲郎

1. 沼津という街

5月22日(火)思い立って沼津駅ー三島大社ー箱根峠ー芦ノ湖スカイラインへドライブに出かけた。メンバーは筒井哲郎・律子、佐藤和宏の三人。気温 20±2°C・湿度 25%前後、快晴という心地よいドライブ日和だった。

沼津駅周辺を見たかったのは、沼津市が 1000 億円規模の補助金を出して鉄道と道路を立体交差する計画を進めており、駅周辺の住宅地の人々が立ち退きを迫られているという情報を聞いたからである。

計画が企画されたのは十数年前のことで、その後、伊豆半島を縦断する別の自動車道路が開通し、駅周辺の交通混雑は自然に解消していた。したがって、一旦鳴りを潜めていた立体交差計画だが、ここにきて駅前の再開発を絡めて再燃しているという。この大規模計画は地元の政治家・ゼネコン・JR の利権が立ち枯れの巨木のように根を張って、古い計画がそのまま推進させる勢いだとのことであった。

行ってみると、沼津市の町並みは穏やかで落ち着いた地方都市の印象だった。駅周辺以外に高層ビルは建っておらず、建物の威圧感を感じさせない、それでいて活気のある健やかな市街である。しかし、駅前ロータリーとその周辺は、人工的などの地方都市の駅前にも共通する画一的な大型店舗が目立って、閑散として疲労感すら漂っている。

街のリニューアルはどのようになされるべきか？ 全国一律ともいえる高架式立体交差・駅ビル形式だけが再開発の"かたち"なのだろうか？

古くからの宿場町・港町である沼津市は、東海道の陸路・海路を結ぶ交通の要衝であり、人・物・情報の交流拠点として、この地域の政治・経済・文化の中心的役割を担ってきた。気候が温暖で、伊豆半島・箱根・富士山へのアクセスが便利なことから、保養地としても発達した。明治以降には政財界人の別荘や皇室の沼津御用邸が建てられ〈海の見える軽井沢〉とも称された。そうした土地柄へのプライドが、後に国家プロジェクトともいべきコンビナート計画を退散させるほどに強い、住民たちの環境意識・反公害意識醸成の基になったようである。

駿河トラフ(海溝)東端が湾の沖に位置することで海産資源が豊富な一方、以前から東海地震の危険性が指摘されている。再開発計画に際しては、このあたりが地震多発地帯であること、とくに平地(沖積層)の脆弱さは、厳しく検討されるべき条件である。

2. 駿河湾石油コンビナート計画

脆弱地盤を争点の一つとして、1960年代に沼津・三島市を中心に起きた住民運動があった。国家プロジェクトともいえるべき大計画を、住民の力が駆逐した稀な実例として再評価を促したい。

1961年2月「第六次静岡県総合開発計画」で沼津・三島の東駿河湾地区は、石油コンビナートの建設を前提とする重化学工業・最重要地域とされた。沼津市には巨大タンカーの接岸施設と火力発電所・工業団地が計画され、漁民を中心に反対運動が起こった。日本は高度経済成長のただなかにあり、公害問題や環境問題が社会の俎上にあがる直前の時期でもあり、反対運動は補償問題にメドが着いたことで一旦沈静化した。

しかし、石油コンビナートの候補地とされた沼津地区の海岸が、地盤の脆弱さから三島地区に変更された。海産資源の豊かな江浦湾まで犠牲にする計画の強行に三島市の反対運動が再燃、プロジェクトの一角だった大手電機メーカーの撤退をきっかけに、計画は事実上頓挫する。それでも、計画復活の動きは「第二次コンビナート計画」として継続されていた。

1962年7月、「工業整備特別地域指定」の閣議決定をかわきりに、静岡県が〈奥の手〉ともいえるべき、二市一町合併(沼津・三島・清水)を画策した。計画頓挫の原因が地域の利害対立にあつと見抜き、バラバラな自治体の足元をみてのことだったのだ。三島市の明確な反対姿勢に比べ、工業団地建設をカタに取られたかたちの沼津市は優柔不断な対応で、確かにその足並みは揃っていなかった。

1962年後半から1963年にかけて全国各地で公害問題が噴出しはじめた。急激な産業活動の歪みが露わになってきたのである。この時期、三島市は国や県の露骨な策動を牽制する狙いもあってか、日本初の〈環境衛生都市宣言〉を発している。後の反公害運動や規制強化による公害対策に道を開く、先駆的な自治体の行動はこの地から始まったのである。

1963年12月、合併協議会の終了間際、静岡県は「第二次石油コンビナート計画」を電撃発表した。これには三島市をはじめ反対自治体が猛反発。沼津市で建設が強行されようとしていた火力発電所は大気汚染を懸念する住民の声に押され、東駿河沿岸を走るパイプライン建設については、万全の公害・防災対策を「安全神話」よろしく連呼するだけの静岡県の対応に、地域住民の不信感は募るばかりだった。

1964年9月16日、沼津市が計画の全面撤回声明。市議会で計画への反対決議が可決され、東駿河湾石油コンビナート計画は完全に消滅した。

もしも、計画がそのまま遂行されていたなら、風光明媚な東駿河沿岸の風景は、煙突とタンクが立ち並びパイプラインが縦横に走る一大コンビナート地帯に変貌してしまっていたことだろう。ヘドロに埋まった近隣の田子の浦や、スモッグに覆われた三重県・四日市などの二の舞をкаろうじて回避できたわけである。反対運動のかがり火を三島市が掲げ、沼津市がしんがりを務めた趣だが、いずれにせよ、この結果は住民たちの切実な生活

実感と、目先の損得を超えた不屈の意思によってもたらされたものだ。

こうして、沼津・三島地域と東駿河湾一帯の自然環境・居住環境は守られ、現在の市民・住民に引き継がれることになった。

55 年も前の出来事を書き列ねた理由を改めてまとめておこう。

- ①今を生きる沼津や三島の人々が、かつて苛烈な反対運動を繰り広げ、その闘いに勝利した住民の直系子孫であることの意味合いは大きい。
- ②〈東駿河湾コンビナート〉の顛末と闘いの軌跡を検証し直せば、今後予想される沼津駅前再開発・高架線立体交差訴訟の取り組み方のヒントが見つかるのではあるまいか。世代は変わっても、変わらない地方の精神風土(住民の気質・人づき合い・こだわりなど)を知ることは、住民運動推進の前提だと思う。
- ③〈石油コンビナート計画〉撤回の要因の一つに、このあたりが有数の地震多発地帯であることが挙げられる。関東地方の大地震(大津波)の発生確率は年毎に高まっており、都市計画も鉄道計画もそのことを無視しては成立しない。ましてや、地盤の脆弱が指摘される沼津・三島地域である。高層化・高架化による再開発はその前提からしてふさわしくない。計画がそうした方向で動いているのなら、市民・住民の側から低層化・地下化を積極的に提案すべきではないか。

3. 三嶋大社

沼津の市街から郊外の住宅地を抜け、三嶋大社を目指す。沿道の家々はみな小綺麗で庭木や街路樹は緑豊かだ。若葉燃える季節は今、生命力に溢れる快晴の五月である。

三嶋大社は伊豆の国の一の宮として、律令時代に建立され、鎌倉時代は源氏政権の守り神として尊崇され、今も大切に維持されている由緒正しい神社であり、一度は訪れようと思っていたところであった。

客殿と社務所をつなぐ真っ直ぐに並んだ柱(無垢木)立ての回廊は奥行きを感じさせて美しい。その脇に等身大ほどの青銅像が建っていた。束帯・袍衣の平安貴族のような装束、緑青の浮き具合から比較的新しく建立された銅像のようだ。傍らの能書きに〈矢田部盛治像〉とある(境内には盛治を顕彰した古い石碑も立っていた)。

第 66 代三嶋大社神主・矢田部盛治は掛川藩家老の三男として生まれ、19 歳で代々三嶋大社の神主を務める矢田部家に養子に入った。26 歳で神職を継ぐも、その 4 年後に発生した安政の大地震(1854 年)で神社の建造物はことごとく倒壊。盛治は大社復興のため全国を勧進行脚して、15 年をかけて現在みられる建築群に再建。勧進だけでは賄い切れなかった巨額の費用は氏子の負担とせず盛治一人の借財とし、借金返済のため生活は清貧そのものだったという(その完済は次の代まで持ち越されている)。壊滅した神殿の再建を実現し地域の発展に貢献した矢田部盛治は文字通り三嶋大社の中興の祖と称えられてしかるべき人物である。

神職に留まらず盛治には社会的な活動にも顕著なものがあつた。幕末、東海道から江戸を目指す官軍進行の報に接した盛治は、伊豆の神官たちを召集、彼らを中心に伊豆伊吹隊(自警団)を結成して三島地区の治安維持にあつた。官軍の箱根越えでは隊を率いて先導したが、これも伊豆地方を戦禍に巻き込まないための行動だつたといわれている。さらに盛治は私財を投げうって近郊の開墾に乗り出している。大社の東側を流れる大場川対岸の小高い祇園山に、灌漑水路となる隧道を開く難工事に挑み、現在の三島市加茂川町一帯に10%以上の新田開発を行った。長く地元住民に慕われ顕彰に至つた由縁である。矢田部盛治の生涯は倫理的(宗教的・哲学的)信念に貫かれていたように思われる。

この神社の境内は整然とした玉垣に守られて、境内には富士の湧水を取り入れた池などを配し、四方を大樹の林に囲まれ周辺の自動車道路の喧騒を視界からも騒音からも遮断して清潔ですがすがしい空間を守っている。拜殿の様式は出雲大社を一回り小さくしたような由緒を感じさせるものであつた。



図1. 三嶋大社本殿 (同神社ホームページから)

4. 大國魂神社

矢田部盛治に注目したのは現在の三嶋大社と三多摩を代表する大國魂神社を比較するにあたり、一つのポイントになると考えたからだ。大國魂神社の近・現代の記録に、矢田部盛治のような社会意識と倫理観を備えたリーダー的な神官は現れてない。

鎮守の森を寒々としたまばらな木立の境内に変貌させた大國魂神社の精神的な退行は、すでに戦前から始まっていたようだ。

大化の改新(654年)の後に武蔵国・国府が置かれ「武蔵府中」と呼ばれたこのあたりは、古来より関東一円を結ぶ交通の要衝であつた。鎌倉時代末期、坂東武者軍団を率いて鎌倉を目指す新田義貞と、それを迎え撃つ北条泰家率いる幕府軍が分倍河原で激突した。幕府軍を破つた新田義貞はその勢いのまま鎌倉街道を一気に南下し、難攻不落(天然の要塞都市)といわれた鎌倉を数日で陥落させた。この鎌倉街道と交差するあたりから大國魂神社にいたる甲州街道沿いの宿場町が「府中宿」であり、江戸時代には経済・文化

の交流拠点として賑わった。また、昔からこのあたりには軍馬や耕作馬を供給する馬市が立っていて、とくに日本が戦争への道をひた走る明治・大正・昭和の時代は、軍政や国策への接近が顕著になっていく。

首都圏に大型の建造物が建ち始める1900年代に入ると、主要な建材である多摩川の砂利を求めて次々に鉄道が乗り入れてくる。1910年(明治43年)・東京砂利鉄道。1916年(大正5年)・京王電気鉄道(現在の京王線の一部)。1922年・多摩鉄道(現在の西武多摩川線)。

1923年(大正12年)の関東大震災の復興では、揺れに強いセメント建築の需要が一層高まった。1925年-玉南電気鉄道(現在の京王線の一部)。ちなみに日本最大の「府中刑務所」は、震災で大破した巣鴨刑務所の移転問題を継承するかたちで建設された(1924年9月着工・1935年3月完成)。

1929年には南武鉄道(現在のJR南武線)が開通するが、この路線は軍用鉄道の色彩の強いものであった。昭和10年前後になると武蔵府中界限には軍事施設や軍需工場の進出が相次ぐ。1934年・日本小型飛行機。1938年・日本製鋼武蔵製作所。同年・陸軍燃料廠。1940年・東芝府中工場。日本が太平洋戦争に突入する1941年(昭和16年)・陸軍航空隊の要請により府中・三鷹・調布にまたがる〈調布飛行場〉が建設される。戦時中は防空訓練用の軍事専用飛行場として使用された。この飛行場は戦後、米軍の使用や部分返還など曲折を経て、現在も航空自衛隊〈府中基地〉(滑走路のないヘリポートのみの航空基地だが)として配備されている。また、府中市東部の白糸台付近には戦時中に戦闘機を格納した掩体壕(四基)が現存している。いずれにせよ、戦前戦中のこうした軍需産業との結びつきが府中の戦後のまちづくりに与えた影響は小さくない。1930年に約8500人だった人口が敗戦の年・1945年には約22000人(3倍近く)にまで増加している。この時点ですでに相当数の人口の流入が起きていたのだ。

府中が大國魂神社を中心に発展してきたことは歴史が物語っている。神道を標榜する日本の軍閥が太平洋戦争の開戦を間近に控えて、格式のある神社を有するこの地に肩入れすることは時代の趨勢だったのかも知れない。では受け入れる側の地付きの住民たちはどうだったのだろうか。空襲に晒されることもなくほぼ無傷のままの町並みと住民たちの府中であり、大國魂神社の荒廃も現在につながるまちづくりも、その始まりは戦後からのようである。

府中町・多摩村・西府村の一町二村合併による府中市の誕生は1954年4月1日、敗戦から10年を迎える節目の直前のことだ。戦後の土地を巡る最大の出来事はGHQ主導の農地改革(1945~1950年)であろう。戦中から人口の流入が続いていたとはいえ当時この辺りは、ほとんどが田畑の広がる田園地帯、過酷で見返りの少ない野良仕事に従事していたのは土地を持たない小作人たちだった。身動きの取れない身分制度の中で何世代にも渡って貧困にあえいできた彼らが、農地解放によって瞬く間にそれぞれ自立した地主になった。山深い山村から波濤に洗われる漁村まで日本国中の彼らに与えられたく自由

の恩恵)であり、お国に差し出した息子たちの〈命の代償〉でもあった。そうした新興地主とその係累たちが、不動の票田として長く日本の保守政治を支えていくことになる。

かれらの多くはそのまま農業に従事したが、ここ府中は首都に適度な距離を保つ将来のベッドタウン候補地であった。とくに高度経済成長期以降には地価が高騰して新興地主たちは土地の切売りやマンション建設に奔走した。持ちつけない大金を手にしてギャンブル(府中に競馬場・競艇場。調布に競輪場)に狂い夜の街に入れ込んで、一・二代で破産、一家離散した者も少なくないという。巧みに立ち回り不動産事業などに成功した新興地主の中には地元の顔役や市議員におさまった者も多い。

1950年代の航空写真には大國魂神社のくっきりした方形の鎮守の森と黒々と続く並木の参道、それを横切る京王線の線路(高架線ほどには目立たない)が写っていて、この頃の府中はまだ神社町の面影が色濃い。鎮守の森の荒廃は高度経済成長期からバブル期にかけて加速(1960年・86000人~2018年・269000人の人口増加も見逃せない)していったようだが、それらを主導したのは守るべき伝統へ意識の希薄な新興地主たちだったと思われる。いずれにせよ、今われわれが身近に接する武蔵の国の一の宮である大國魂神社は玉垣を失い、鎮守の森を失い、境内を蚕食して市の郷土館ビルが建ち、駐車場が境内に入り込み、京王線府中駅の高架鉄道や新甲州街道が参道をズタズタに横切って、見るも無残な様相を呈している。三嶋大社とのこの違いは、地方の人々の間にコミュニティがしっかりと維持され文化が共有されているかどうかと、利権に群がる地付きの顔役に一時的な金と欲望につきあげられて都会へ出てきた烏合の衆が結託して、その土地の文化を破壊して虫食いのように食い荒らした結果の違いであろう¹。



図2. 大國魂神社 (同神社ホームページから)

¹ 京王線府中駅前開発が大國魂神社周辺の景観を損ねている現状については、海渡雄一・筒井哲郎『沿線住民は眠れない』緑風出版、2018年、pp.184-186

5. 復興する街並み

さすがに、戦後の焼け野原から経済一辺倒で「近代的な」建物をニョキニョキ建てるだけでは住み心地の良い街は作れないということが認識されてきて、いくつかの復元計画が進んでいる。

日本橋の上を欄干すれすれに覆っている高速道路はさすがにまずいという声はずっとあったが、ようやくその前後の高速道路1kmを地下化する計画が実現するようである²。

最近金沢市内の景観復元は目覚ましい。年に2~3回帰省しているが、昼頃に金沢駅について親戚へ行こうとバスターミナルへ行くと、観光客が長蛇の列をついでいるのに驚かされる。観光客が増えてホテルの予約ができない状態が続いており、現在ホテル建設計画が目白押しで、客室数は名古屋市をしのぐ規模になるのだという。さらに、中国や韓国の大型客船が接岸できるように金沢港の埠頭を拡充する計画も進んでいるという。

確かに一昔前と比べると街並みがずいぶんと良くなってきた。第一にすっきりしたのは金沢城内の復元である。明治になってから、場内は陸軍の施設が建てられて、師団が駐屯していた。また、城の石垣の下には第四高等学校の赤レンガの校舎や運動場などが設けられていた。第2次大戦後は、城内が金沢大学の敷地になり、陸軍の建物のいくつかが校舎に利用された。1989年から2005年にかけて大学は郊外の角間町に移転し、その後敷地を城址公園として由緒ある建物を復元して、江戸時代を偲ぶ美しい公園に生まれ変わった³。また、旧第四高等学校の敷地も中心部の広い公園になり、レンガ建ての建物は1党だけ残して博物館になっている。つまり、150年経って、機能一点張りの町並みから、景観と居住性を重視した街並みに変わったのである。そのような変化が、外から人を呼び込む人気を得たのである。

この変化を見ていると、京都の街並みが機能を追及して魅力を失いつつある現状と真逆の方向をたどりつつあるように見える⁴。

6. 歴史的建造物の復興

第2次世界大戦の後半にアメリカが本格的に参戦してから、大規模な空襲を浴びせかけ、ドイツの主要な都市は徹底して破壊された。歴史ある古都・ドレスデンやヴェルツブルクなどが有名である。それらの都市は、形ある石材の一つひとつを拾い上げ、旧市街をほぼ忠実に再現した。今も中世の街並みそのままの雰囲気を楽しむことができる。とりわ

² 「日本橋の首都高、地下化」『日本経済新聞』2018年5月23日

³ 筆者の従弟・木越隆三氏が石川県教育委員会金沢城研究調査室に勤務して、その復元計画に尽力した。NHKの「ぶらたもり」でも案内役を務めた。同調査室編『よみがえる金沢城』①2006年、②2009年

⁴ 「山際の消えた京都と公共空間を私物化する東京」『筒井新聞』第329号

<http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/329/329-3.pdf>

け、どの町でも、中心的な教会は、忠実に復元する努力を重ねている。

2016年の熊本地震のあと、地元自治体はいち早く熊本城の復元に着手した。被災者の住宅の手当てがまだ行き届かない時期であった。それが、地元の人びとに対して、復興の旗印を示すシンボルであったのだろう。いわば、町火消が火の粉の降る屋根の上に立って纏を振る動作に似ている。

7. 長期の視野を持ったコミュニティの形成

今、目先の利益に引きずられた街づくりや高層マンションの建設が進んでいる。しかし、それらは決して何百年も継続するものではない。いずれは、ヨーロッパの街並みのように、一時的なものが消えて、何百年も続くものだけが残っていくだろう。人口増加の趨勢が一段落するこの世紀を機に、どの町も、すでに1000年の歴史を数えた神域や史跡を中心に、人が住みよい街をもう一度構想する時ではないだろうか。

(2018年6月13日)